

## 論文の内容の要旨

論文題目：三重県尾鷲市尾鷲方言のアクセント研究

氏名：平田 秀

本論「三重県尾鷲市尾鷲方言のアクセント研究」は、三重県尾鷲市尾鷲方言のアクセントについて、共時的記述を試みたものである。

第1章は要旨である。「序論」である第2章においては、三重県尾鷲市の地理や交通について述べたのち、本論で扱うデータをどのような方法による現地調査で得たかの概要を述べた。

第3章は「日本語アクセント概論」である。第4章以降で尾鷲方言のアクセントの記述を始める前に、日本語諸方言にみられるさまざまなアクセント体系について、その概要を述べた。日本語アクセントは、「式の対立をもつ多型アクセント」「式の対立をもたない多型アクセント」「N型アクセント」の3種に大別され、第4章以降で述べる尾鷲方言は前述の3種のうち「式の対立をもつ多型アクセント」に分類される。

第4章は「尾鷲方言のアクセント体系について」と題し、同方言のアクセント体系について詳述した。尾鷲方言は、音調の下がり目を規定する「下げ核」と、文節全体の音調の方向を規定する「式」によって記述されるアクセント体系をもつ。下げ核の担い手は拍であり、「単語のうちのどこか」が問題になるという点で諸言語に見られる強勢(stress)と類似の要素であると言える。式は筆者が $\alpha$ 式・ $\beta$ 式・ $\gamma$ 式と呼ぶ3種が存在し、「複数種のうちのどれか」が問題になるという点で諸言語の声調(tone)と類似の要素である。日本語諸方言のうち、3種の式の対立をもつものの報告はこれまでに香川県観音寺市伊吹島方言1つしかなく、非常に稀な音韻的特徴であると言える。また、尾鷲方言においては、特定のアクセントをもつ文節が、前後に来る文節のアクセントによってその単独形と異なる音形で出る現象がみられる。これは、式同士が関与して起こる現象であると考えられ、世界の諸言語においてみられる tone sandhi の現象の枠組みでとらえられるものである。

第5章は「尾鷲方言の音響分析」である。同方言が3式の対立および下げ核の位置の対立をもつことを、基本周波数の推移を中心とする音響分析によって主張した。5拍からなる文節の $\alpha$ 3型、 $\beta$ 3型、 $\gamma$ 3型、 $\alpha$ 2型を比較することで、下がり目の位置と下がり目までの音調の方向の対立がみられたことを示した。また、4拍 $\alpha$ 2型の語と4拍 $\beta$ 3型の語をランダムに発音した結果を提示し、両者が安定して異なる音形で出たことを示した。

第6章は「類別語彙との連関」である。尾鷲方言のアクセントと、金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』においてアクセントに応じて設定された類別語彙との連関について述べた。尾鷲方言は、類別語彙として設定された語のうち、特

に3拍名詞と3拍動詞のアクセントから、近世初期まではその当時の近畿中央部の方言と同系統であったが、その後現代に至るまでの間に別の系統へと変化したと考えられることを指摘した。

第7章は「和語の単純名詞」である。尾鷲方言の1拍から4拍までの和語の単純名詞アクセントについて扱った。4拍名詞において第4章で述べた3式の対立がみられた点が特筆すべき点である。

第8章は「複合名詞アクセント」を記述した。尾鷲方言の後部1拍から後部4拍までの複合名詞アクセントについて、その規則を述べた。後部要素の拍数別にアクセントの概略を述べると、以下の通りとなる。なお、「-⑥型」は語末から数えてn拍目が下げ核を担う型を、「⑦型」は無核型を表す。後部1拍複合名詞は、 $\alpha$ -②型で出ると $\alpha$ ⑦型で出るとに分かれる。後部2拍複合名詞は、 $\alpha$ -③型、 $\alpha$ -②型、 $\alpha$ ⑦型、 $\beta$ -②型に分かれて出る。後部3拍複合名詞は、 $\alpha$ -③型、 $\alpha$ -②型、 $\alpha$ ⑦型、 $\beta$ -③型に分かれて出る。後部4拍複合名詞は、 $\alpha$ -④型、 $\alpha$ -③型、 $\alpha$ -②型、 $\beta$ -④型に分かれて出る。全体の傾向として、下げ核がおかれる場合は形態素境界の付近におかれるという特徴がある。なお、尾鷲方言においては式の存在する諸方言に広くみられる「前部要素の式が複合名詞全体の式に反映される」という「式保存の法則」が成立せず、後部要素がどのようなものかによって複合名詞の式と下げ核の位置が決定されているという大きな特徴がある。

第9章では「外来語のアクセント」を扱った。尾鷲方言の外来語アクセントについて詳述した。外来語は、通方言的に無標のアクセントの出やすい語種であり、尾鷲方言においても無標のアクセントを考察する上で外来語が重要な役割を果たすと考えられる。同方言の外来語アクセントにおいては、式が $\alpha$ 式1種にほぼ決定される。このため、尾鷲方言における無標の式は $\alpha$ 式であることが示唆された。また、有核か無核か、有核の場合下げ核をどの拍が担うかは拍構造によってある程度予測できることを述べた。

第10章は「単純動詞のアクセント」である。尾鷲方言の単純動詞のアクセントについて2拍から4拍までの拍数別に述べた。4拍単純動詞においては、筆者が同方言の記述を行うにあたって新たに設定した $\beta$ 式が無標の式であると考えられること、 $\alpha$ 3型、 $\beta$ 3型、 $\gamma$ 3型の3式の対立がみられることが特筆すべき点である。

第11章は「単純動詞の活用形」と題し、尾鷲方言の2拍から4拍までの単純動詞の活用形について述べた。いずれの動詞においても、活用させると基本形とは異なる式が出現することが同方言の大きな特徴である。～タイ形のアクセントは基本形に関わらず全て $\alpha$ 式で、～タカタ形は $\beta$ 式で出る。これは、第13章で述べる形容詞のアクセントが動詞の活用形において出現しているものにとらえられることを述べた。

第12章は「複合動詞のアクセント」である。複合動詞の基本形のアクセントについて述べた。複合動詞アクセントにおいては、共時的な「式保存の法則」が成り立つとは言えないものの、 $\gamma$ 式の複合動詞の前部要素に大きな偏りがみられた。また、4拍 $\beta$ 3型

(=  $\beta$ -②型) の一段動詞が後部要素になると複合動詞全体も  $\beta$ -②型になりやすい現象が存在した。第 8 章で述べた複合名詞においてはほぼ後部要素のみによって複合名詞全体のアクセントが決定される規則を述べたが、複合動詞においては前部要素・後部要素の両方がアクセントの決定に関与していると考えられることを述べた。

第 13 章は「形容詞のアクセント」である。本章で対象とするのは、2 拍から 6 拍までの単純形容詞の基本形、4 拍から 8 拍までの複合形容詞の基本形、2 拍から 5 拍までの単純・複合形容詞の活用形である。3 拍単純形容詞において  $\alpha$ -③型 (=  $\alpha$ 1 型) がまともに見られる以外は、単純形容詞・複合形容詞を問わず  $\alpha$ -②型で出るのが大きな特徴であった。

第 14 章は「助詞のアクセント」である。助詞のアクセント上のふるまいは【順接】【順接 ( $\gamma$ 0 例外)】【前核/順接】【独立】【独立'】【特殊 ( $\alpha$ 0 >  $\beta$  式)】の 6 種に大別され、そのうち特に【特殊 ( $\alpha$ 0 >  $\beta$  式)】の助詞は、「 $\alpha$  式の有核型の文節から核による下降が 1 拍遅れて  $\beta$  式が成立した」という、第 4 章で筆者の述べた仮説を強く支持するふるまいをみせることを述べた。

第 4 章で述べた通り、筆者は尾鷲方言のアクセントの記述において  $\alpha$  式・ $\beta$  式・ $\gamma$  式の 3 式が不可欠であると判断しており、多くの語種において先行研究に記述のなかった  $\beta$  式の語・文節が得られることを述べた。